

## 柳田國男旧蔵考古遺物入手のいきさつと関連資料について

The Process by which Kunio Yanagita Collected Archaeological Artifacts, and Relevant Materials  
MINOHARA Yasuhiko

箕原泰彦

はじめに

柳田國男旧蔵考古遺物は、筆者が柳田國男の長男の柳田為正より、一九八九年六月一日と同年九月一日に頂いたものである。遺物はサハリンのソロイヨフカ、福島の高館故趾、長野県下伊那下川路、等や出土地不明のものなど、小石や貝化石も含めて総数六六点左右で、注記やメモなどによって、主に明治三八年前後の頃に本人が各地で採集したか、譲り受けたもののようなものである。

柳田民俗学として著名な柳田國男は、考古学に対して冷ややかな態度であったといわれているようである。そのような印象を受ける柳田や研究者の文章を散見する。しかし初期において、柳田國男がこのような考古遺物を保持しており、それが残っていたということは興味深く、何かこの遺物を基に、柳田國男と考古学について考えてみたいと思ひ、折にふれて関連資料を集めていた。

ところが残念なことに、これらの遺物を筆者に寄贈して下さった柳

田為正が平成一四（二〇〇二）年五月二八日に亡くなった。また日頃ご教示をいただいていた平井尚志も同年に亡くなった。

その後もこれらの遺物には手を付けられないままであったが、平成一五（二〇〇三）年になって、以前これらの遺物に関心を持って下さった菊池誠一氏（現・昭和女子大学）にお会いした際に、これらの遺物事を気にかけておられた。また、日本大学の百年記念館でサハリンの遺物の展示が行われているのを見て、柳田國男の遺物の中にサハリンの遺物があることを思い出し、私の中で急いでこれらの遺物をなんとかしなければならぬと思うようになった。その後、国立歴史民俗博物館の設立、楽博己先生にお会いした機会に、柳田國男旧蔵考古遺物のことを相談し、国立歴史民俗博物館に寄贈しようと決心し、菊池誠一氏の助言もあり、柳田國男が所蔵していた遺物を国立歴史民俗博物館に寄贈し、今回、柳田國男旧蔵考古遺物の入手のいきさつについてまとめた。

## ① 柳田國男旧蔵考古遺物入手の経緯

柳田國男の著作に次のような文章がある。「庭に来年の花の木を植えようとして、土を掘りかえてみるといういろいろの土器の破片が出てくる(後略)」。昭和五年五月の成城学園時報に発表され、後に水曜手帖としてまとめられ、昭和三八年七月に定本柳田國男集第三巻に始めて収録された、「旅と故郷」〔文庫版全集第三巻解題五九八頁〕と題する短い文章の冒頭部分である。

筆者は東京都世田谷区に在住し、地元の郷土誌に興味を持っていたため、この文章を読んだ時に、この文章に出てくる庭は、一般的なことを言っているのか、当時柳田國男が住んでいた自宅の庭のことを言っているのか疑問を抱いた(写真1)。当時、柳田國男が住んでいた現在の世田谷区成城の住まいの場所は、世田谷区の遺跡地図にも登録されておらず、地形的にも遺跡のありそうな場所ではないものの、もしかしたらここに遺跡があるかもしれないと疑問を抱いたまままでいたところ、柳田國男の長男、柳田為正が偶々私の店に寄って下さり、面識をもつことができた。

その後、折にふれて柳田為正から色々ご教示いただくようになり、上記の柳田國男の「旅と故郷」の文章についても尋ねたところ、柳田國男・柳田為正の自宅の庭で出たものではないが、為正の自宅の床下に土器が保管しており、近々家を取り壊すので、そのとき出てきたら下さるとの事だった。

一九八九年六月一日、為正より床下から土器が出てきたから取りに来るようにと電話連絡をいただいた。遺物は為正の住居内の床下収蔵庫に長い年月収蔵されたままだったようだが、うかがった際には写真2・写真3のように取り出された状態だった。

為正と筆者とでざっと目を通したところ、ほとんどが為正の少年時代

の採集品であったが、一部墨書き等で注記のある物は、柳田國男の字だと為正が言っていた。為正自身も柳田國男の遺物が出てくるとは思っておらず、驚いていたようだった。

このときに見つかった考古遺物は、柳田國男旧蔵品と思われる遺物を含めてすべて為正から筆者に分けて頂いた。分けて頂いた遺物は、建物北東の角の床下のコンクリートに囲まれた半地下に、段ボール箱等五箱に入れてあり、他に板碑三基があった。段ボールは比較的最近の各種の空き箱を利用しており、その中に更に小さな箱がいく種か入っていた。

板碑については、為正が昭和三年頃、現在の成城四丁目の国分寺崖線上のどこかで採集したものらしいが、特定はできない。『世田谷区資料第八集考古編』によると成城四丁目の某家に板碑があり、やや離れた成城三丁目の中神明遺跡ではないかとの記載がある。為正の採集品も成城三丁目で採集されたものかもしれない。

以下に五つの箱(A~E)の概要を記述する。

### (一) Aの箱 三四×二七×一〇cmの赤い箱

この箱には蓋はなく、文字も模様もなかった。この中には、名刺箱(写真4、写真5)、東京日々新聞に包まれた石器四点(写真6、写真7)、御霊文楽座の番付?に包まれた磨製石斧(写真8)、時期不明の古新聞に包まれた磨製石斧と土器片(写真9)、ラベルが貼られた石器一〇点(写真10・11)、その他の石器や土器片一九点(写真12・13)があった。以下に、名刺・石器・土器について気がついた点を記す。

#### ① 名刺箱

出土地不明の石器や化石が入っていた。

② 明治三九年九月二四日の東京日々新聞に包まれた石器四点(写真6、写真7)。

柳田國男は明治三十九年八月一二日から一〇月二〇日の間、東北・北海道旅行をしており、この時の物だろうか。出土地は不明である。

③御霊文楽座の番付?に包まれた磨製石斧(写真8)。

明治四二年一〇月三〇日印刷十一月一日発行の番付に包まれていた石器である。

④時期不明の古新聞に包まれた磨製石斧と土器片(写真9)。

⑤注記のあるラベルの貼られた石器一〇点(写真10、写真11)。

この注記がもう読めなくなっているものが多いが、ソロイヨフカ、信下伊那下川路字今村[ ]原山上柳(?)と読めるものが含まれている。そのほかに石器や土器片一九点(写真12、写真13)があった。なお、写真10、写真11、写真13、このグループ分けには意味はない。

### (II) Bの箱 三二×四一×三〇cmのナショナルテレビの段ボール箱

Bの箱には四分の一程にさまざまな物が入っていた。石製勾玉、前山と墨で注記された磨製石斧、黒曜石製ポイント、注口土器の注口部、上田国分寺と墨で注記のある布目瓦片、神代村入間と注記のある剥がれ落ちたラベル等である。この中の物は、為正が成城の西隣の調布市入間町の現在の城山遺跡付近で採集した遺物に、柳田國男の遺物が混入しているように思える。選りだした遺物が柳田國男の旧蔵品と断定するには根拠の弱い物もあり、まだ残っている可能性もある。

### (III) Cの箱

三二×三五×四・五cm (C1) の中に八点と、一六×三〇×四・五cmの箱(C2) 中に一二点、計二〇点の遺物が入っていた。八点のうち一点は布目瓦片で、半欠のヘラ描き?の文字が残っている(図1)。

他に弥生土器かと思われる土器片が一片あり、内外面に線刻画?が描かれていた(図2)。

箱C1の八点のうち、一片だけ出土地の分かるラベルが残っており、これには、「千歳村向台(中略)中江氏テニスコート」とあることから、現在の成城九丁目の西台遺跡にあたるようである。他の遺物は現在の西台遺跡では採集できないような遺物であり、為正が採集した各地の遺物に柳田國男旧蔵の遺物が混在しているように思われる。

箱C2の一二点には、単なる石一点、凡字形石器三点、縄文土器片六点、弥生土器片一点、完形カワラケ一点があった。カワラケを除いて、すべて出土地不明だが、はがれ落ちたラベルには、「昭和三年四月二日(東字?) 砧村喜多見高台登戸に面する」と書かれていた。このラベルの注記に該当する場所は、現在の成城一・三・四丁目の国分寺崖線に沿った所だと思わ

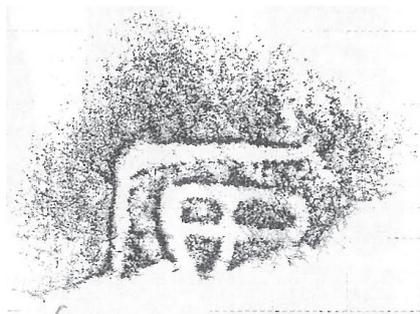


図1 布目瓦片

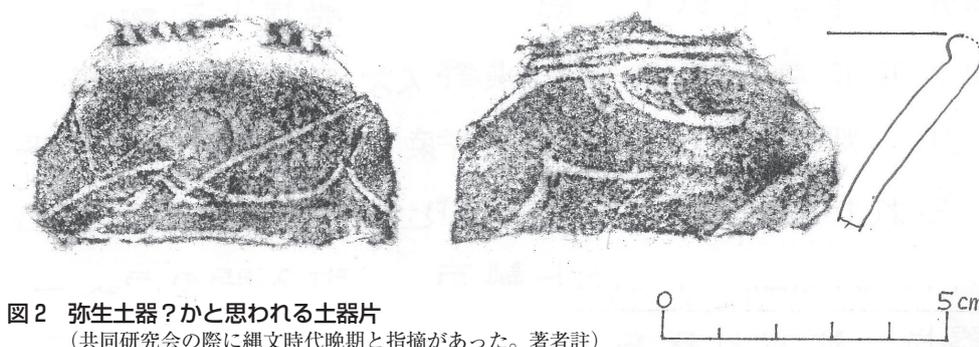


図2 弥生土器?かと思われる土器片  
(共同研究会の際に縄文時代晩期と指摘があった。著者註)

れる。特に四丁目の上神明（かみのしんめい）遺跡は、凡字型石器の出土例が多いため、柳田為正が上神明遺跡で採集したものが中心になっているのかもしれない。登戸に面するという点では、成城三丁目から一丁目にかけての場所のほうがふさわしいかもしれない。完形のカワラケは、柳田為正がまだ新宿の家に住んでいた頃、当時の自宅の近くで採集したものと本人から伺った。

なお歴博のデータベースでは、C2の箱に入っていたカワラケについて、筆者が新宿の元の柳田家の庭から出土したと考えていると書かれているがこれは誤解である。柳田為正から伺った話では、元の柳田家の近くから為正が採集したものである。

#### (四) Dの箱

四〇・五×三三・五×一七・五cmの箱いっぱい土器片と打製石斧が詰っていた。点数は数えていない。このなかには「昭和三年二月二八日神奈川県都築郡山内村石川□平川□畑の側にて土器大半」と注記のある紙の貼られた土器片や、「北多摩郡神代村入間」のラベルの貼られたチャート製石器片、「昭和三年一月一日南多摩郡多摩村（？）連光寺」と書かれたラベルの貼られた打製石斧一点等があった。また、剥がれ落ちて上部が欠損しているが、「(神奈) 川県都築郡(□) 大字石川小字保木□二八・一二・二八□。二九・三・二四」と書かれている紙片も入っていた。このほか、この箱の大半の遺物は、柳田為正がこれらの地域で採集した遺物が混在しているようである。

#### (五) Eの箱

三一×二三・五×一六・五cmの木の箱の中に、一三・八×二一・三×三・一cmの母箱二つで蓋をするように遺物が入れてあった。そのうちの二つには、「志村小豆沢貝塚」と記入のある剥がれ落ちたラベルとともに、

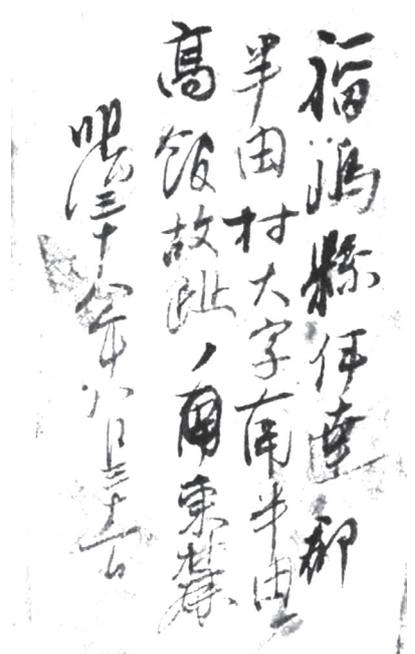


図3 柳田國男の字と思われる筆で書かれた注記

獣骨片一七片、貝二点が入っていた。もう一つには土器片、石器片等およそ四〇点ほどが入っており、内一点には「昭和二(三か)年一月千歳村下祖師谷」のラベルが貼ってあった。

下のほうには、柳田國男の字と思われる、筆で書かれた注記(図3)のある和紙に包まれた石器三点と小石一点があった(写真14)。その他多数の土器片や石皿片一点等が有り、内二点のみ注記が残っており、「昭和□年十一月武蔵砧村喜多見桑畑にて採集」、もう一点は、「四、一月二十二日代々木練兵場」と書いてあった。他に注記はなく出土地不明だが、この近辺では見かけない土器片が一片あった。大部分は柳田為正採集の遺物であり、和紙で包まれた遺物と、東京周辺では見かけない土器片一片のみ、柳田國男関連の遺物と思われる。獣骨片は昭和四年一月二七日に為正が小豆沢貝塚で採集したものである。

#### (六) 不明・その他

筆者の不注意でどの箱に入っていたのか分からなくなった上、バラバラになってしまった墨書のある紙片がある(図4)。これは虫食いとカビでボロボロだったが、折りたたまれていたので開けようとしたところ

表1 柳田國男旧蔵品と思われる遺物一覧

番号	出土地	元箱	遺物	点数	備考
1	福島	E	柳田國男自筆注記の和紙に包まれた剥片1, 小型ポイント? 2, 小石1	4	写真14, 図3
2	ソロイヨフカ 樺太	A	磨製石斧完形品6点	6	ラベルに注記があり地名・人名は樺太紀行にてでくる。写真10・17・18
3	下川路	A	断片になってしまった和紙(墨書注記あり)	(1)	台紙に貼り合わせる
	下川路	A	下川路のラベルの貼られた打製石斧2点	2	写真11の左の2点, 写真19
	不明	A	ラベルの字が欠損しているが多少読める打製石斧	1	
	不明	不明	磨製石斧2点, ペンダント? 1点	3	1989年9月18日にいただく。写真15・16
	不明	A	名刺箱に入った14点(化石3点, 小石2点, ナイフ形石器?ポイント, 石鏃等完形品や欠損品を含めて9点)	14	写真4・5
4	不明	A	明治39年9月24日の東京日日新聞に包まれたポイント4点	4	写真6・7
	不明	A	明治42年の御霊文学座の番付?に包まれた磨製石斧1点	1	写真8
	不明	A	磨製石斧(ラベルの字は消えている)1点	1	写真9
	不明	A	古新聞(明治の頃か)に包まれた土器片1点	1	写真9
5	不明	A	土器片11点, 石1点(ラベルの剥がれたあとがある), 石器4点, 化石? 1点, 石鏃3点, 剥片1点, 文字は読めないが剥がれ落ちたラベル片	20(1)	上記2のソロイヨフカものも混在しているか? 為正の採集品も混在か? 写真13
6	不明		前山と墨で注記のある磨製石斧1点	1	A以外の箱に柳田國男の遺物が混入しているようなので, 各箱から筆者の判断で選び出した。関係のないかもしれないし, まだあるかもしれない。図1・2
	不明	B	石匙1点	1	
	不明	C	布目瓦 へら描き?がある 1点	1	
	上田		上田国分寺と注記のある布目瓦小片1点	1	
	不明		線刻画?が表裏にある弥生土器片1点	1	
	新宿?		完形カワラケ1点	1	
	不明		白い曲玉1点	1	
	不明		土器片1点	1	
	不明		土器片1点	1	
			合計	66(2)	
			谷田部達郎旧蔵標本箱	3	標本箱に T.YATABE

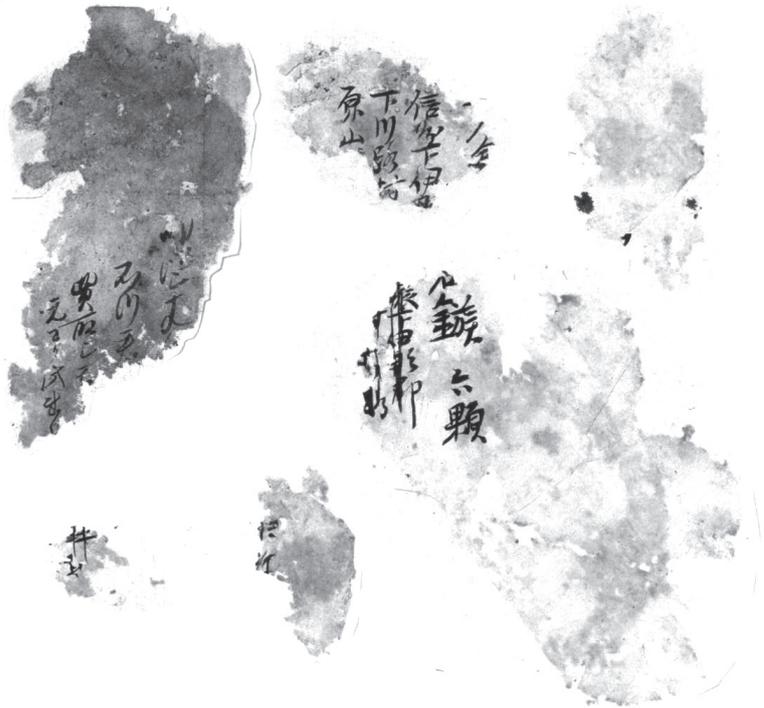


図4 墨書のある紙片

以上、柳田為正が少年時代に表面採集した遺物に混在するかたちで、柳田國男の遺物が残っていた状況について記述した。出土地が不明であり、正確に柳田國男の旧蔵品であるとは断定できない遺物もある点には注意が必要である。

詳細は省略するが、写真10、写真17、写真18などは貼られているラベルからサハリンの遺物と思われるものがあり、柳田國男の樺太紀行に出てくる人名や地名と関連している。

写真14、図3の福島県伊達郡の遺物は、和紙に書かれた明治三八年の字が読み取れ、またこの年に柳田國男も東北旅行をしていることから、遺物と関連付けることができる。

バラバラしてしまった和紙に残る注記は、ラベルに残る注記と同じ地名が出てくるが、「石鏟」とあるため、写真20の石鏟が関係しているのだろうか。その他、調べなければならぬことが多く興味深い。筆者の手にはおえない。

## ② 柳田為正少年時代の表面採集活動

柳田為正の考古遺物の表面採集は、主に成城に越してきた昭和二年頃から始められている。この頃少年達の間では流行っていたようであり、為正の話によれば、表面採集に熱中している者を、仲間内で「ドキチ」と言っていたようである。<sup>(1)</sup> 主な採集地は日記や注記等から分かるため、それを表にまとめた。

日記に名前が出てくる中村は、中村哲（一九二二—二〇〇三）で、為正の先輩にあたり、先に考古遺物に親しむようになり、為正に影響を与えた人物である。中村哲の採集品は、保管してあった渋谷区松濤の家が戦争中に戦災にあい焼失したようである。中村哲は当時柳田國男にも

バラバラになってしまった。復元を試みたが不可能であったため、文字のない部分は捨て、残りを台紙に貼り付けた。どのようにつながるのかは不明である。中には何も入っていなかったように記憶している。Aの箱に下川路の遺物が有るので関係するのかもしれない。

これらとは別に、一九八九九年九月一八日に柳田為正から石器を三点譲り受けた。これは為正が図書を整理していた際に出てきた遺物で、注記はなく出土地不明であるが、柳田國男が採集したか、譲り受けた物のようである（写真15、写真16）。

会っており、『柳田國男の思想』（一九六七年、法政大学出版局）という本も出版している。

昭和六年一〇月二五日の成城高校地歴研究会発掘行の日記に出てくる「今井」と「角田」は、確認はしていないが、今井富士雄と角田文衛（一九一三―二〇〇八）であったかもしれない。

昭和初期に「発掘」が流行っていたようであるが、当時都市化が郊外へと発展していくに伴う開発が関係しているのかもしれない。為正らの熱心さや採集品を柳田國男がどのように見ていたのかは興味深いが、現在となつては不明である。

なお、為正の日記の昭和四年一月一日の項にある「御料林の瓢箪塚」は、後に前方後方墳とされた砧中学校七号墳である。（その後二〇一〇年三月一九日発行の『砧中学校遺跡Ⅱ』三四頁、註一一のなかで前方後円墳に訂正された）

### ③ 柳田國男の蔵書三冊について

柳田為正からは、考古遺物の他に折にふれて次のような関連資料をいただいた。柳田國男旧蔵と思われる本三冊（清野謙次著『日本人の研究』、中谷治宇二郎著『日本石器時代提要』、東京帝国大学編『日本石器時代地名表第五版』）。これらは為正が少年時代には考古学に興味を持っていたため、柳田國男の蔵書から為正の蔵書に加えられていたものようである。他に少年時代の土器片採集に関する日記のコピー数日分、地域研究のコピー三枚をいただいた。本三冊は成城大学民俗学研究所に寄贈済みである。

『日本石器時代地名表（第五版）』東京帝国大学 昭和三年 岡書院  
一九八九年四月一七日に為正からいただいた。表紙の革が傷んできている。扉では『日本石器時代遺物発見地名表』となっている。また「第

表2 柳田為正の表面採集活動

年月日	採集地	備考	元の箱
昭和2年11月	武蔵砧村喜多見桑畑	注記	E
昭和3年1月	千歳村下祖師谷	注記	E
昭和3年4月2日	砧村喜多見高台登戸に面する（剥がれ落ちたラベル） （※現在の成城3丁目下神明遺跡か）	注記	C2
昭和3年11月14日	南多摩村連光寺	注記	D
昭和3年12月28日	神奈川県都築郡山村村古川平川	注記	D
昭和4年1月1日	中村哲氏と御料林内で塚を見る （柳田國男から正月早々そういうところに行くものではないとしかられたとの事）	日記（談）	
昭和4年1月22日	代々木練兵場	注記	E
昭和4年1月27日	小原一夫氏山口君と小豆沢貝塚へ発掘に行く （このときのものと思われる遺物が残っている）	日記	E
昭和4年3月10日	中村氏と登戸へ採集に行く	日記	
昭和4年5月12日	中村と早稲田第一高等学院の『亀ヶ岡出土陳列会』に行く	日記	
昭和6年10月25日	成城高校地歴研究会発掘行で折本貝塚へ発掘に行く	日記	
不明	千歳村向台（現在の成城9丁目西台遺跡か）	注記	C1
不明	神代村入間（現在の調布市城山遺跡か）	注記	B D

五版出版二際シテ」と題して松村瞭が昭和三年一〇月の日付で本書の成り立ちについて述べている。その中で、「岡書院主岡茂雄氏ノ盡力ト岡書院ノ坂口保治氏ガ編集ノ一部ヲ補助サレタ厚意トハ是シ亦深謝スル所デアル。」と述べている。奥付に記されている初版から五版までの発行年によると、初版は明治三〇年である。この年に柳田國男は二三歳であり、第一高等学校を七月八日に卒業し、九月に東京帝京大学法科大学政治科に入学している。

『日本原人の研究』清野謙次著、大正一四（一九二五）年、岡書院発行  
一九九三年二月一日に為正にいただく。見返しの贈呈の文字が記され、その下に二〇mmほどの岡書院の赤い印が押されている。本書にはところどころに一〇×五五mmほどの青や緑や白や朱の色の付箋が挟まれたり、三六ページ、二四四ページ、三四七ページは角が折られたりしている。それらのページには四×五×二×三mmほどにちぎられた青っぽい紙片が貼り付いている。これは、為正によると、紙をちぎって、つばで貼り付けたものとのことであった。

本文中二一五～二六一ページにかけて、樺太調査の記述がある。三六四ページに赤字で「大正一四年六月二六日了柳田國男」と書き込みがある。

『日本石器時代提要』 中谷治宇二郎 昭和四年 岡書院

一九九三年二月一日に為正からいただいた。自序中に「本書の刊行について坂口保治君には校正を擔当せられ、今井富士雄君には索引をつくられた。」とある。奥付に中谷と岡の二人の検印が貼ってあるのが興味深い。

以上いずれも岡書院発行の三冊は、為正が考古学に興味を持っていたので、父國男の蔵書から為正の蔵書に移ったものらしい。『日本原人の

研究』は明らかに柳田國男旧蔵本である。他の二書がそうであるという証拠はないが、為正の話などからその可能性が高いと考えられる。

『日本石器時代地名表（第五版）』や『日本石器時代提要』に出てくる坂口保治は当時岡書院の人物で、後に独立して梓書房を創り、『山』という雑誌を発行した。今井富士雄とともに為正の日記に出てくる。これらの本が出版された頃の様々な状況は興味深いが、省略せざるをえなかった。

なお、柳田國男の蔵書は、成城大学にある分が著名だが、方言関係は慶應義塾大学言語文化研究所に〔西村亨編『柳田國男方言文庫目録』、農政関係〔柳田國男寄贈帝國農會所藏圖書の現在〕藤井隆至 昭和五九年『日本歴史』二月号四二九号〕に、その他、炭焼き日記（昭和二〇年七月二六日）の項に、『考古学雑誌』一揃他を日比谷図書館に渡したという記述がある。飯田に田屋が移築された時に飯田市に寄贈された本があるかもしれないこと、沖繩のどこかの島に寄贈された柳田為正の蔵書に、まだ柳田國男の旧蔵書がまだ紛れ込んでいるかもしれないといった点については未確認である。

#### ④ 柳田國男と考古学

柳田國男と考古学との関係について、今後検討したいと考えて集めた資料があり、それを紹介したい。

##### (一) 矢田部良吉について

矢田部良吉は官費で明治三年にアメリカのコネル大学へ留学し、明治九年に植物学を修めて帰国した。明治一〇年に東京帝国大学発足時に理学部の初代の植物学教授となった人物で、柳田國男の妻の姉の伴侶で、柳田國男の義兄にあたる。東京帝国大学初代の動物学の教授にはモースがなった関係で、矢田部はモースの通訳をしたり、翻訳をしたりしてい

る。著名なモースの『Shell Mounds of Omori』の日本語版『大森介墟古物編』は矢田部良吉の訳である。これらのことから、何か柳田國男と考古学との接点はないかと考えている。

矢田部は後に東大を失職し、明治三二年に亡くなった。この頃柳田に養嗣子の話があり、仮に矢田部の新体詩の方との繋がりがあったとしても、考古学の面での繋がりは付けにくそうである。

今回提供した遺物を入れた標本箱の一つに、ローマ字でT. YATABEと書かれているものがある。これは柳田が矢田部良吉にかわって「本当の子供のように思つて」「矢田部勤吉「叔父の事など」定本月報三三可愛がつた、矢田部達郎の事である。矢田部良吉が息子に買い与えたものが、為正に回ってきたようである。

## (二) 柳田國男と考古学についてのメモ

柳田國男と考古学についての研究では、谷川章雄一九九〇「江戸の考古の方法をめぐって」〔新宿歴史博物館「江戸のくらしー近世考古学の世界―』と、谷川章雄一九九一「地下に埋もれた民俗資料」〔月刊文化財平成三年一月号〕が比較的詳しい。都出比呂志一九八六「日本考古学と社会」〔岩波講座日本考古学七〕も触れている。

このほか、エピソード的な断片であるが、以下に列記する。

① 昭和二〇年七月二六日に考古学雑誌「柳を日比谷図書館に寄贈したようである。〔炭焼き日記同日の項、文庫版全集三三卷四二〇頁〕

② 高橋健自『考古学』の紹介文。〔新しい全集二四卷三〇二頁〕

③ 谷川健一『常民への照射』一〇頁から。

「また考古学者の小林行雄は、彼の著書『日本考古学概説』を柳田に呈上したとき、柳田から日本の考古学も少しは進歩したねとほめられたと、気むづしい顔を綻ばせて私に告げた。日頃柳田は考古学

に対して蔑視をかくさず、日本中の土地を一尺ずつ片っぱしから掘ってごらんと言っていたからである。」

④ 石田英一郎 一九六三「偉大なる未完成―柳田國男における国学と人類学―」〔石田英一郎全集三所収、柳田國男伝一〇八六頁〕。

「柳田先生がいかに考古学の限界を突いても、先生の民俗学の方法は、年代の順位規定にあつては考古学以上に証明を欠くのである。」

⑤ 齊藤忠 一九九二『月刊文化財』(一九九二年九月号一七四頁)

齊藤忠が少年の頃民俗学か考古学かでまよい、柳田國男を訪ね相談したとき柳田から、「飯を食える学問をやれ」と言われた。

⑥ 吉村日出東 一九九九『日本歴史』(一九九九年一月号第六〇八号 九三―一〇八頁)

「東京帝国大学考古学講座の開設」という論文を書いている。柳田國男の名前は出てこないが、何か関わっていないだろうか。

⑦ 岡谷公二 一九八二「詩人柳田國男の意味」〔『国文学』二七卷一号、昭和五七年一月号〕

「柳田國男の民俗学は、一面において見えざるものの探求というところができよう」

「目に見える有形のものに対する柳田國男の無関心の理由のない軽侮の例は、いくつも見い出すことができる。」

「柳田國男の有名な考古学批判も、同じ意味を持っている。『…土器、鉄器のかけら、古い骸骨の示すことなら信ずる。生きた人間の信じ行ひ記憶して居ることは省みぬ』〔郷土生活の研究法〕を書くとき、彼は有形の、目に見える物だけを対象とするこの学問を、或いは同時代のこの学問の傾向を、はつきり軽蔑していた。」

⑧ 神崎宣武 二〇〇一「柳田國男とモノ」〔柳田國男全集第二七卷月報二五〕

「陶器の白々とした光が我々の台所風景を明るくしたことは、別に

説いてもよい興味ある一つの事件であった」〔柳田國男『明治大正史世相篇』ちくま文庫柳田國男全集二六巻所収〕を引用して、「柳田はモノに無関心ではなかったのだ。多くはとりあげなかったが、そこにも十分な目くばりをしていたのである。」

⑨今井富士雄 一九八四『神奈川県伊勢原市大入遺跡発掘調査報告書』〔玉川文化財研究所六三頁〕。

「柳田國男先生が考古学の悪口を言うからと先生の本は読まないことになっていたのはどうも本当らしい（山内清男の事、筆者註）。柳田國男先生が考古学を民俗学の引き合いにだしてよう痛烈に批判するが、なかなかもつともなところがある。少し長いが為になるので引いておく。「性欲学の大家としてのみ日本には知られている、ハブロック・エリスは、曾て其の随筆中にこんなことを言っている。遺跡遺物の学をして人類運命の解説たらしめんには、地球の表皮を深さ約二丈から三丈、全体に引きめぐって見なければならぬと。それはやや無理な難題であるが、少なくとも考古学の取り扱っている遺物なるものが、縦にも横にも甚だ僅かなる一標本、所謂大海の一滴、九牛の一毛であるという謙遜の態度だけには必要と思ひます。現に遺物という名こそ与へられていませんが、人類学の取扱はうとしている「我々生きた人間」も亦一種の遺物である」〔著作集二五―四八七〕。エリスの提唱には驚いたらしく、他の処でも引用している。

〔著作集二四―四五六、二五―六〇〕。

⑩後藤総一郎編 一九八八『柳田國男伝』の別冊年譜によれば、明治四四年一月九日、考古学会評議会に出席。大正二年四月一九日、栃木県足利へ考古学会の遠足会。等の記事がある。

⑪昭和三七年の米寿の祝賀会で梅原末治が祝辞を述べている。京都大学系の考古学者と関係が深いようにみえるが、これは京都大学が日本で最初に考古学教室を開いたこと、あるいは市河三喜を介して濱

田耕作とのつながりが考えられるかもしれない。市河三喜『昆虫・言葉・国民性』（昭和一四年）は濱田のことについて触れているが（三三四―三三七頁）、柳田國男については触れていない。

## 6 おわりに

柳田國男と考古学については、私の調べでは見落しも多いと思うが、まだまだとまった研究はなされていないようである。そのせいか、断片的な発言では、柳田國男の考古学観あるいは物の見方をどのように捉えているかについて矛盾点もみられるようである。今回寄贈した遺物がその研究の役に立てば幸いだが、これまで述べたように、為正の採集品と混乱している恐れもあり、資料批判的作業も必要であろう。

「考古」少年として東京周辺で採集していた柳田為正は、父である柳田國男から否定的には言われていなかったようで、むしろ「こんなのを専門にやるのもいいな」と言われていたと聞いている。なぜ考古学への道へ進まなかったのかについては為正から聞きそびれたが、『国立歴史民俗博物館研究報告』第五一集四〇五ページ〔記録・柳田為正「せがれのみた柳田國男」国立歴史民俗博物館研究報告』第五一集三九九―四一六頁〕や、中村哲『新版柳田國男の思想』（法政大学出版社二九七頁）などが参考となる。

C2とした箱に入っていた完形のカワラケ質土器は、誰が採集したかは不明だが、おそらく為正だったと思われる。もしそうだとすると、為正は成城に越してきて中村哲に誘われる以前に、自分一人で採集していたのかもしれない。柳田國男の自宅で採集したものでなくても、発端となった筆者の疑問の答えは、成城の柳田國男の自宅ではなく、それ以前の加賀町の庭だったのかもしれない。

柳田國男が青年の頃、海岸に打ち上げられた椰子の実を見て、晩年の『海上の道』が出版されるひとつのきっかけになったようには、これら

の土器片をきつかけとした著書は生まれなかったようである。しかし、柳田國男の心の中には、おそらくこれらの遺物を通して何らかの思いが秘められているように思う。柳田國男は考古学に対して冷淡だったと言われるのは、民俗学を守り育てるためのやむをえないことだったのかも知れない。今回の遺物が、それらのことを、より深く多面的に研究するきつかけの一つになることを期待している。

#### 謝辞

設楽博己先生には柳田國男旧蔵考古遺物の国立歴史民俗博物館での受け入れ、研究途上の為正氏の少年時代の採集遺物の受け入れ等々、また私事にわたりお世話になりました。改めて感謝いたします。遺物や関係資料を分けてくださった故柳田為正氏、日頃助言や関係資料をコピーさせてくださった故平井尚志氏に改めて感謝いたします。私が二人にお世話になったのは晩年の二〇年ほどですが、お二人は少年時代より考古学に興味を持っており、現在の世田谷区成城一丁目にあった砧中学校七号墳は、日本初の考古学辞典と言われる平井尚志他二人編集の本の口絵写真となり、少年時代の為正の日記にはその墳丘のスケッチが描かれています。

遺物提供時には、入手のいきさつを書いておくようにご教示くださった菊池誠一氏（現・昭和女子大学教授）に感謝いたします。

最後になりましたが、初期のまとまらない文を整理してくださった上、表の作製や改正に力をつくしてくださった工藤雄一郎先生に感謝いたします。

#### 追記

遺物提出時に添えた本稿の元となる「柳田國男旧蔵考古遺物入手のいきさつについて」は、国立歴史民俗博物館に遺物を受け入れていただき、

遺物を資料化するための参考にしていただければとの思いからでした。そのため研究論文の体裁ではなくやや雑然としていたものを、工藤雄一郎先生のご助言により整えていただいたものです。<sup>(2)</sup>書いた当時はパソコンを使用していませんでしたが、その後インターネットによる検索ができるようになり、調べてみたところ何点か面白そうな論文やホームページが見つかりました。しかし目的は達成されたあとでしたので追加記入は差し控えました。本来は公開を目的としたものではありませんでしたので、削除された部分もあります。また、一ヶ所砧中学校七号墳が前方後円墳に訂正されたことを付け加えました。土器の見方の誤りについて一箇所訂正していただきましたが、他の箇所においてもある誤りはそのままです。ご了解ください。文責は筆者にあります。<sup>(3)</sup>

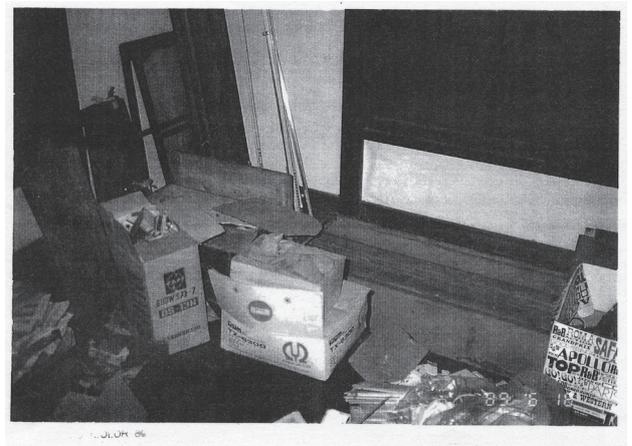
#### 編者註

- (1) 現在では差別的な用語であるが昭和初期には普通に使用されていたため、本稿でも当時ののままの表現とした。
- (2) 本稿は、養原泰彦が資料を国立歴史民俗博物館に寄贈した際に記したもので、二〇〇三年七月二十九日の日付で執筆されたものである。国立歴史民俗博物館研究報告に掲載するにあたり、工藤雄一郎が一部文章の修正等を行い、全体を整えた。
- (3) 本稿に掲載された遺物の写真および実測図、土器の拓本は養原泰彦が撮影・作成したものである。

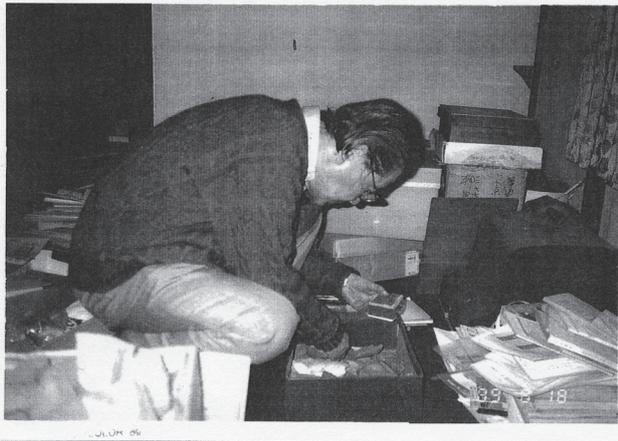
（中の原書店店主、国立歴史民俗博物館研究協力者）  
 二〇一五年七月一七日受付、二〇一六年三月二十九日審査終了



**写真1 柳田國男と為正の旧家**  
 右が柳田國男の旧家で後に飯田市に移築された。その左の建物が柳田為正の住まいだった所で、この柳田為正の住まいの床下より考古遺物が見つかった。



**写真2 床下収納庫から取り出された状況**  
 板碑も含まれている。



**写真3 遺物を見ている柳田為正**  
 赤い箱には柳田國男旧蔵の遺物が集中的に入っていた



**写真4 Aの箱の中の名刺箱**



**写真5 名刺箱の中にあつた遺物**



**写真6 新聞紙に包まれた石器**



写真7 新聞紙に包まれた石器4点



写真8 御霊文楽座の番付?に包まれた磨製石斧



写真9 時期不明の古新聞に包まれた磨製石斧と土器片  
虫食いが酷く新聞紙を広げられない



写真10 注記したラベルが貼られた石器



写真11 注記したラベルが貼られた石器



写真12 その他の石器や土器片



写真13 その他の石器や土器片



写真14 和紙に包まれた石器



写真15 為正から譲り受けた石器

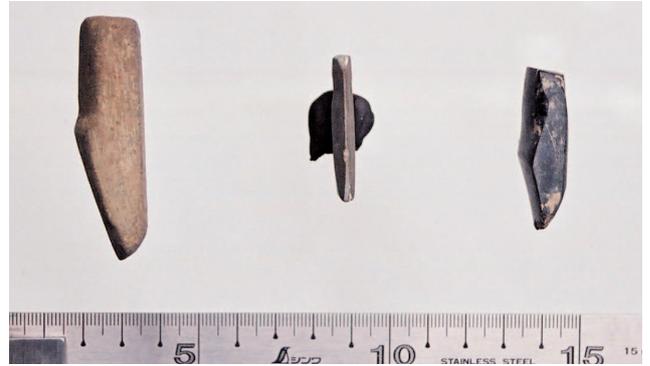


写真16 為正から譲り受けた石器



写真17 サハリンの遺物と思われる石器  
ソロイヨフカ、吉川の字が読める



写真18 サハリンの遺物と思われる石器  
田村の字が読める



写真19 和紙の注記と同じ地名のラベル



写真20 石鏃